

たくし一人ぐらいは不作である方が、却つて夫の身のためと思ひなおしてもいる昨今でございます。

(本学清水澄助教授令聞)

自然と生活

(シヤンティニケートン)

田中典彦

インドの朝は早い。午前四時半頃にはもう牛の引く車の音が聞えてくる。昼間の、あのぎらぎらした太陽の暑さを避けて人々が活動を始めるからである。朝のすがすがしさはこの国でも同じである。広々とした平原に点々と散ばっているこんもりと繁つた林がある。それが村人達の生活の場である。生の営みは朝の火起しに始る。真新しい太陽が闇を打ち破つて東の空を白め始めると、朝もやと共に、それぞれの林から幾筋かの生活の煙がたなびく。その筋をかくぐるように家畜の群が移動する。実にのどかな風景ではないか。こちよきに身をまかせてばんやりと小さな丘の上に立っていると、やがて近ずいてきた煙が鼻をくすぐる。日本の煙の臭いとはちがう。炊事につかうグテ(牛糞を乾燥させたもの)のそれである。慣れないものには鼻をつくように感じられるが、毎日その中にいる者には香ばしく、いかにもこの国らしいものを

覚える。

大学の授業も早朝から始まる。大きな森林の中のあるところに白い建物がポツリポツリとあるというのが第一印象である。何階建てかのビルが建ち並んでいる日本の大学のイメージとは全く異なる。自然の中に学ぶこと、それが創始者タゴールの心だという。休み時間などよく校内を歩き回つたものである。マンゴーの巨木のつくる大きな蔭は恰好のクラスルームとなる。小中学生達は各自の座具を持ち、それを敷いて勉強する。いたるところでこの円陣授業が開かれている。こちらでは英語、あちらで数学、その向う側では歌、そしてドラマのけいことといった具合である。授業が終われば学園内はさながら公園である。樹々の中を走り、ころげ回るのである。通用門をくぐつたところにある有名なサーラ樹の並木では可愛らしいリス達が飛びはねていた。

太陽が天空のほぼ三分の一を駆け上ると、こういったのどかな風景はかき消される。今まで生きていたすべてのものがまるで影を潜めてしまうのである。人々は家の窓という窓を閉ざして眠に入る。だらりと葉をしながら樹々の下には子供達に代つて、牛やガダと呼ばれるロバの一種が、さもだるそうに時々体をブルブルゆするようにしてしばしの涼をとっている。昼食のための生活の煙は、今度は人間の溜息のように感じられる。

平原の夕焼け空は見事である。よく友とともに夕日を見にと近くの丘や川辺に行ったものである。ハーモニカと笛を持

つて。魚釣りをしているおじさんには「つれますか」、行き会う人には「きれいな夕日ですね」。日本人なら夕焼にカラスを思ふかも知れない。だが沢山いるカラスは何故か飛ばない。田畑で労を終えた人々は三人、五人と列をつくり、声高らかに民謡を口ずさみながら帰りを急ぐ。夕闇がせまり黒が他を被う頃、がぜん生命が生き返つたように活気を取り戻すのである。ブンニマ（満月）の夜はことさらである。村々に響くムリダンガの音は夜の更るの知らない。やさしい月光が人々に生の喜びと平安を与えるようである。人間が月へ行くようになって。進んだ文化はこの生活を原始的だと片付けるかも知れない。では、自然とは何なのか？、人間は自然の中の何なの？改めて考えること多いのではなからうか。

（たなかてんげん・文学部講師）

流水不腐

―舞台のうえの紅小兵―

藤堂 恭 俊

中国を訪れた六日目の夜、つまり石壁玄中寺に曇鸞・道綽・善導三祖師の遺跡を偲び、さらに人民の憩いの場として賑あっている晋祠に、聖母や三十有余の侍女たちの塑像、貞観二十年の唐太宗御書の碑、金代の大吊鐘、渾渾とわき出る水

源などを見学し、宿舎でのレセプションがすんだあと、すぐ近くの劇場（五百人ぐらい収容できそうな簡素な建物、客席は五人がけ木製の椅子）で、山西紡績機械廠職工子弟学校の紅小兵たちの踊りや歌を見せて頂くことになった。茅台酒をはじめ立新鮮啤酒や長白山葡萄酒で、消毒もすつかり行きとどいたあとであつて、酔気のいたすところ、こつくり・こつくりとやらないだらうか、と懸念しながら劇場に入ると、私たちの足並にあわせた割れるような拍子に迎えられる。薄ぐらい場内には、既に兵隊さんが客席の大半を占め、開幕おそしと待ちわびている様子が伺われた。

開幕のベルとともに、小学校の二、三年生であろうか、可愛い女の児が舞台の袖にあらわれ、司会の労をとる。なかなか堂に入ったもので、高く澄みきった声、その仕草たるやこましくれて愛くるしい。紅小兵たちが日頃、少年宮で課外活動として鍛えあげた成果を踊りに、歌に、劇に披露してくれるので、なかなか「楽睡眠」どころではない。中国語を解せぬ私なれど、「森のなかの運動会」だけはよくわかり、興味をさそわれた。それもそのはず、懐しい「うさぎ」とかめ」の童話劇であつたが、ただその幕切れ寸前は他を侮り、みずから怠つた兎は、他の動物たちの批判よろしきを受けて自己批判し、ついに森のなかの動物たちが団結して平和な森を実現するという、いかにも新中国にふさわしく仕立てあげられていた。

私たち一行は公演がおわつたあと、案内されるまま舞台に